

開拓期の旭川

1868 年、明治政府が成立しました。翌年、政府は蝦夷を北海道と改名し、この北方の辺境地の開発を始めました。上川盆地に派遣された役人たちは、この地域が農業に適していると報告し、1890 年に上川盆地に旭川、永山、神居の村々が設立されました。

屯田兵として知られる農民兵士たちは、日本の北方国境を守りながら農業のために森林を開拓する仕事を政府から与えられました。当初は元武士だけに限定されていた屯田兵は、後に日本の本州からの農民も含むようになりました。屯田兵の家族は 1891 年に永山、1892 年に旭川、1893 年に当時永山の一部であった当麻に到着しました。屯田兵と一般の農民は豆類、小麦、ジャガイモなど、寒冷地に適した作物を栽培しました。いくらかの実験の後、彼らはこの地域での稲作を確立しました。

旭川の村は北海道北部の交通・通信の拠点として徐々に発展していきました。1893 年に郵便・電信局が開設され、1898 年には旭川と滝川を結ぶ上川線が開通しました。1900 年に旭川は町と制定され、翌年には大日本帝国陸軍の第 7 師団が札幌から旭川に移転しました。北海道の屯田兵コミュニティと本州北部の軍事予備兵から集められた約 1 万人の兵士が町に駐留しました。熟練労働者が建設、食料生産、その他のサービスで基地を支援す

るために旭川に移住したため、この軍事的存在が地域の商業・産業発展を促進しました。